

メルロ＝ポンティにおける「動機付け」と「自由」 — 『知覚の現象学』から『意味と無意味』へ—

田村 正資

1. はじめに

本論では、モーリス・メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』で提出した「動機付け (motivation)」という概念について論じる。動機付けとは、或る知覚経験を持った主体がどのような状態にあるかを記述するための概念である。主体は、知覚経験において経験の対象によってなにごとかへと促されている。対象と主体とのあいだに成立し、主体をなにごとかへと促すというかたちで、三つの要素によって記述される関係が動機付けである。このような関係は、世界をゼロからすっきり構成し尽くしてしまう主体、あるいは、主体とは無関係にそれ自体として存在する世界といういずれの考えも退けようとしていたメルロ＝ポンティにとって、主体と世界が相互に絡み合う様相を記述するために「ぜひとも形成しなければならない〈流動的〉概念のひとつ」(PP 61)であった。

メルロ＝ポンティの動機付けを扱った先行研究はすでにいくつも存在しており、一定の成果を挙げていると言える。しかし、それらの先行研究のなかでは、メルロ＝ポンティ自身が『知覚の現象学』のなかで示唆しているにもかかわらず、動機付けと「自由」の関わりについては論じられていない。その理由としては、『知覚の現象学』で記述された動機付けと自由の関係が曖昧であることが挙げられる。メルロ＝ポンティが描き出そうとしていた動機付けと自由の関わりをより深く理解するためには、『知覚の現象学』が出版された1945年に書かれ、1948年に出版される論集『意味と無意味』に収録された論文「戦争は起こった」における記述を参照する必要がある。そこで動機付けと関係付けられる「偶然性」や「不合理性」、「情念」という概念を踏まえなければ、メルロ＝ポンティにおける動機付けと自由の関係をより詳細に記述することはできな

い。この研究は、メルロ＝ポンティが論じた動機付け概念の包括的な見取り図を提供し、メルロ＝ポンティにおける自由という、いまだ十分な解明を受けているとは言えない主題を扱うための新たな基礎の構築を企図している。

第二節において、従来の研究を踏まえながら『知覚の現象学』における動機付け概念について説明する。先行研究では、しばしば曖昧な表現にとどまるメルロ＝ポンティの記述から、動機付けを因果性や合理性とは異なる意味的な関係性として、そしてタイプのな行為方針への規範性を持つ関係性として、特徴付けている¹。

第三節では、先行研究によっては十分に引きあげられていない、メルロ＝ポンティの「状況付けられた自由」と動機付けの関係性について説明する。『知覚の現象学』の最終節「自由」では、動機付けと自由の結びつきについて述べられている。ひとは動機付けがあるにもかかわらず自由なのではなく、動機付けを手段として自由なのである。しかしながら、彼が述べる「状況付けられた自由」の内実は曖昧なままにとどまっている。なぜなら、主体が自由であるためには動機付けが必要であることが述べられてはいても、動機付けられた主体が自由である必然性については述べられていないからである。

第四節においては、上述した動機付けと自由の関係を解明するために、『意味と無意味』に収録された論文「戦争は起こった」の一節を解釈する。動機付けをめぐる先行研究のなかでこれまでほとんど顧みられなかったこのテキストでは、動機付けの持つ無根拠性が指摘され、それを埋め合わせるように、世界と主体それぞれの不確定性としての「偶然性」や「不合理性」、そして「情念」という概念が提示される。このテキストの読解を通じて、『知覚の現象学』にとどまったままでは理解することが困難であった、状況付けられた自由と動機付けの結びつきをより詳らかにすることができる。

2. 知覚における「動機付け」—『知覚の現象学』を主な対象として

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において、知覚を理解するための新たな

な関係性としての「動機付け」について論じている²。「主体が動機付けられること」は次のように定式化される。すなわち、「主体Aがxによってyするように動機付けられる」(O'Conaill 2013: 580-581)。O'Conaillの説明によれば、Aは行為する能力を備えた意識を持つ個人であり、xはAが意識している対象、yは行為方針(a course of action)である。以下では、O'Conaillのこの定式から「Aがxによって[……]促される」という部分と「Aが[……]yするように促される」という部分をそれぞれ抽出し、それぞれの関係性がどのように特徴付けられるのかを検討する。

2.1. 「Aがxによって[……]促される」：意味を媒介とする動機付け

メルロ = ポンティは、主体を動機付ける媒介となるもの、すなわち、先の定式における「A」としての「x」を知覚経験の「対象」と呼んでいる。この対象xによる動機付けは、次のようなふたつの段階に区別することができるだろう。すなわち、ぼんやりとした未規定的な知覚的領野のなかから、私たちの知覚的な意識の注意を対象へと向かわせる動機付け(ex. 視野の周縁のものにふと眼を向ける)と、はっきりと知覚された対象が主体に対して持つ意味による判断・行為への動機付け(ex. 炭酸飲料の入ったペットボトルを手にとって飲む)である。

第一段階の動機付けにおいて、私たちは対象によって意識の「注意」を引きつけられる。

対象の統一性を破壊するちょうどその瞬間に、その同じ対象の統一性をひとつの新たな次元において再興するような諸現象が、注意によって現出して来るところに、意識の奇蹟がある。したがって注意とは、諸々の像の連合でもなければ、すでに対象を支配している思惟の自己への還帰でもない。いままでは単に未決定な地平のかたちでしか提供されていなかったものを顕在化し主題化するような、新しい対象の積極的な構成なのであ

る。対象が注意を発動させると同時に、逆に対象はそのつど捉え直され、あらためて注意の依存のもとに置かれる。対象はただ、まだ曖昧な意味を注意に提供してそれを決定してもらうことによるのみ〈認識上の出来事〉を引き起こして自分を変貌させてゆくのであり、それゆえ対象は、注意の〈動機〉なのであって、その原因となるものではない。(PP 39)

いまだ曖昧で未規定なまま知覚野を漂う対象は、注意によって捉え直されることで、よりはっきりとした意味を私に提供するものとして捉えられる。動機とは、「ポジティブな対象として概念化できないが、無ではない（つまり存在でも無でもない）ような「何ものか」の現れであり、風景のただなかにおける、新たな風景の構築への呼びかけである」（廣瀬 2014: 67）。このとき、私たちの注意を促す対象は、いまだ積極的な内容を持ったものとして構成されていないが、何らかの意義を持ちうるものとして私たちに対して働きかけてくる。これが、「注意の動機」としての対象である。

注意を向けられた対象は、それ自身が主体に対して或る意味を持った対象となり、私に特定の構えを取らせ、判断や行為へと動機付ける。これが「或る現象の動機」としての対象であり、ここに見出されるのが第二段階の動機付けである。

先の引用では、私たちの意識の注意を呼びかける対象は、注意の動機であってその原因ではない、ということが述べられていた。メルロ＝ポンティはこのように、動機ないしは動機付けといった概念を、原因ないしは因果性といったものから区別している。だが彼は、動機がその日常的な用法から考えられるように、何らかの行為や判断の「理由」であると主張するわけでもない。動機付けは、物事を原因と結果の結びつきによって記述する因果性や、諸々の行為や判断を推論によって正当化する合理性のいずれとも異なった形式を有しているのである。

では、どのようにして動機付けは因果性や合理性と区別されるのだろうか。メルロ＝ポンティは、私たちの自然的な態度における知覚経験が、私たちが世

界に慣れ親しむ仕方であらかじめ意味的に分節化されていると考える。そのような知覚経験のなかで与えられる対象に、私たちは固有の仕方では応答している。この分節化のされ方、そして私たちの応答の仕方が持つ特徴によって、動機は原因や理由から区別される。この区別を検討するために、まず「対象 x の意味的な分節化」について検討する。

対象 x の意味的な分節化

私たちの知覚経験の領野が分節化される仕方は、必ずしも概念的な認識に負っているわけではない。メルロ = ポンティは次のような例を挙げている。私が道を歩いているとき、私の視覚野に「地面のうえに置かれた平たく大きい石」のようなものが入ってくると、私の知覚 - 運動野がその場所に「道の上の石」という意味を与える。その意味を介して、私は足の裏に滑らかで硬い表面を感じる用意がすでに出来ている (PP 343)。このような例において、対象は概念的な意味ではなく、運動志向的な意味を持つものとして注意の対象となっている。すなわち、それは私のうちに身体的な予料をもたらす意味を受け取ることによって、対象となるのである (ex. とっさに投げられたボールを受け取る、脇道から車が飛び出してくる)。

このように、私たちの知覚は、私たちの特定の応答を動機付けるような仕方では意味的に分節化されている。「動機付けがこの結び合わせを遂行することができるのは、出来事の状態や対象が私たちの身体に対して持つ意味、すなわち運動志向的な意味 (motor significance) によって、[...] 私たちが動機付けられているからである」(Wrathall 2004: 126-127)。知覚野は、私の身体運動との関係において意味的に分節化され、対象を現出させる。それゆえ、その対象は、私を或る身体的な応答へと促す力を持つのである。このような意味付けは、素朴な身体的反応の範囲にとどまらず、私たちが世界をどんなもの「として」経験するのか、を左右する非明示的な基盤となっている。この意味付けの根拠となっているのは、私たちの身体図式および心理的 - 歴史的な構造である。

知覚野の分節化がどのような様式に則ってなされているのか、それを説明す

るために持ち出されるのが主体の「心理的 - 歴史的構造」(PP 519)であるが、知覚においてこの構造がその都度意識されることはない。たとえば、特定のマンガ表現を考えてみよう(線による風の表現や、キャラクターの頬の赤みといった表現)。こうした表現を、マンガを読み慣れた私たちは、「ナウシカの顔に風が吹きつけている」「木之本桜は頬を赤らめている(照れている)」と見るわけであるが、そのことに関して自らの文化的背景をその都度意識しているわけではない。ある表現を私にとって何らかの表現たらしめているものは、大抵のばあい、当の私の意識にはのぼってこない。それゆえ、私たちが自然に受け入れている表現においては、知覚されたものは解釈する私とは無関係にそれ自身がそのようなものとして在るように経験されている(マンガ表現のばあいには、誰にでも通じるような表現様式として解される)。

意味的に分節化された領野のなかで、私が対象をそのようなもの「として」見ているということがいちいち意識されることはない。すなわち、或る「見え」に対して概念を選択し、それによって事物を解釈するという操作は、自然的な態度における知覚では行われていないのである³。

因果性および合理性との差異

では、意味的に分節化された対象 x によって主体が促されるという関係性は、因果性や合理性とどう異なるのだろうか。意味的な観点から記述される動機付けが因果性とは異なっている点として、Wrathall は、動機付けが外延性のみによっては記述できない、ということ指摘している(Wrathall 2004: 119-120)。「二人の思い出の曲を聞いて、彼女は涙を流した」と記述される場面を考えてみよう。このとき流れていた「二人の思い出の曲」を「ある特定の波長を持った音の系列」としても、外延的な指示対象は変わらない。しかし、「ある特定の波長の音を持った音の系列を聞いて、彼女は涙を流した」という命題は、三人称的にみれば依然として真であるかもしれないが、現象学的な記述としては正しくない。なぜなら、彼女がまさに涙したのは、ある波長を持った音の系列による因果的な作用によってではなくて、まさしくそれが「二人の思い出の曲」と

して聞かれたからである。すなわち、動機付けにおける対象 x は、同じ指示対象を持つ別の記述によって置き換えることができないのである⁴。

動機付けの記述は、外延が同じ表現を入れ替えてもつねに成立するものではない。すなわち、動機としての対象 x は、それが主体にとってどのようなものであるのか、という要素を抜きにしては記述しえないのである。それに対して、「A が B を引き起こす」という因果関係についての記述は、A や B の項を、外延を等しくする別の記述に置き換えても依然として因果関係の記述として正しい⁵。

だが、或る対象 x が知覚されたとしても、それによって動機付けられた現象が必ず実現するとは限らない。このばあい、両者の関係はどのようなものなのだろうか。O'Conaill は次のように論じている。動機付けられた現象が実現しなかったとしても、両者の関係を踏まえなければ動機付けられている状態について理解することはできない。だがしかし、これらは相互依存的な関係ではない。なぜなら、動機付けるものが一体どのようなものであるかは動機付けられる行為に依存するが、私たちはこの行為のほうだけであれば、動機付けるものなしにその行為がどのような意味を持つものであるかを理解することができるからである。したがって、動機付けるものは動機付けられた現象に依存し、動機付けられた現象は動機付けるものを顕在化し、理解可能なものとするのである (O'Conaill 2013: 583)。

ここまで、動機付けが因果性と異なることを確認してきた。次に、動機付けが合理性と異なっている点について論じる (cf. Wrathall 2004: 117-119)。まず挙げられるのは、動機としての対象 x の持つ意味は、私たちが或る理由を持って行為するばあいとは異なり、必ずしも明確に意識されている必要はないという点である。それゆえ、私がなにかの行為を動機付けられているときに、それを行為の理由として用いることができるとは限らない。また、主体が或る行為をなすべき理由を持っているからといって、必ずしもその行為へと動機付けられるわけではない。

さらに、動機付けは合理性と対立することがありうる。ツェルナー錯視やミュ

ラー = リヤー錯視においては、描かれた直線が平行であること、線分が同じ長さであることを信頼できる手続きによって検証可能であるにも関わらず、私たちの見え方が訂正されることはない。「二つの直線は平行ではない」「二つの線分の長さは異なっている」という直観がもたらされるとき、この直観は動機付けられてはいてもそれによって正当化されているわけではない。そしてその動機付けは、十分に合理的な理由をもってしても覆されるわけではない。

以上のように、メルロ = ポンティが私たちの経験から別出した、主体と世界との動機付けという関係性における、「A が x によって [...] 促される」という記述は因果性や合理性とは異なる形式を持つのである。

2.2. 「A が [...] y するように促される」：タイプの性質と規範性

私たちの身体図式および心理的 - 歴史的構造に基礎を持つ動機付けは、世界の諸々の特徴が持つ意味への感受性を発動させる。そして、「A は [...] y するように促される」。この節では、この「y するように」という点を詳しく検討する。すでにさまざまな具体例を出して論じてきたように、メルロ = ポンティの議論において、主体はもっぱら行為へのみ動機付けられるのではない。主体は知覚対象を「かくかくのものとして」知覚するように動機付けられたりもする。しかし、ここではさしあたり「y するように」という仕方で行為へと主体を促す動機付けについて扱う。

主体 A は対象 x によって行為 y をするように動機付けられる。このとき、「y するように動機付けられる」とはどのようなことなのか。すなわち、y とはどのようなものか、そして、「するように動機付けられる」とはどのようなことなのか。こうした点について、促される y というのがタイプの行為であること、そして、その動機付けが規範性を持ったものであることが先行研究によって論じられている。この二点について、以下で説明する。

動機付けの持つタイプの性質

本論の冒頭で用いた動機付けの定式「主体 A が x によって y するよう動機付けられる」は、O'Conaill が与えたものであった。彼は、自ら y と規定したもののについて、それは「行為方針 (a course of action)」⁶ であると述べている。行為方針は、具体的なある特定の行為 (a specific action) ではない。

厳密に言えば、主体はある特定の行為を遂行するように動機付けられるのではなく [...]、行為方針を採り上げるように動機付けられるのである。この行為方針は、あるタイプに属するいずれかの行為によって、遂行されるようなものである。(O'Conaill 2013: 581)

適切なタイプに属する行為であれば、それは主体が動機付けられた行為であるとみなされる。たとえば、ボールが飛んできたときにそれを避けようとするばあい、主体は「避けるべきものとして飛んできたボールを避ける」という行為方針を与えられ、なんらかのかたちでそれに従った行為を実行に移すことになる。したがって、動機付けられた主体は或る特定の具体的な行為へと直接促されるわけではない。このように、動機付けられる行為というものはタイプのなものであって、具体的な行為ではない。このことは、前節で論じたように動機が原因として主体に働きかけるのではなく、意味を媒介として主体に働きかけることからの帰結であると考えられる。

規範性

次に、主体がタイプの行為へと動機付けられるという事態はどのように記述されるのか。メルロ = ポンティ研究の文脈において、この問題は知覚経験の「規範性」として主題化されている (cf. Kelly 2004; Kelly 2007⁷⁸)。その基本的なポイントは、知覚経験によって主体が或る行為へと促されるなかで、主体は知覚された状況から或る要請を受け取っている、というものである。動機付けは主体の知覚的な意識とはまったく無関係に身体に見出される傾向性ではなく、非明

示的なものではあっても私の知覚的な意識に働きかけ、私がかくかくの仕方
で知覚すること、行為することを現象学的に要請している。

メルロ = ポンティは、或る対象の知覚経験において、主体はその対象がよりよく把握できるような視点を取るように動機付けられるのだと言う (cf. PP 56-63)。動機付けが現象学的内容を持つことは、動機付けられた規範的な知覚や行為の失敗においてより明瞭なものとなるだろう。私たちは普段から、対象がよりはっきりと見えるように絶えず首の角度や身体の姿勢、眼球の向きを特にそれと意識することなく調整している。だがもしも、動機付けられた仕方
で身体を動かしても対象がよりくっきりとした輪郭を見せないとき、「あれ、よく見えないな」と感じる。このような感じは、私
が対象のよりよい、規範的な「見え」に向かうように動機付けられているにもかかわらず、そこにスムーズに向かうことができないときに顕在化する。動機付けは私たちの一連の経験のなかでスムーズに処理されているときには特別に意識されるものではないが、それが確かに現象学的内容を持っているということは、動機付けの規範的な要請をスムーズに処理できないような場面において明らかになるのである。

このような規範性は、行為の動機付けにおいても同様に見出される。すなわち、行為方針 y は主体に対して「規範的な仕方
で与えられている」(O'Conaill 2013: 584) のであり、「状況は、ある特定の要求をなすものとして把握されているのであって、私の行為はその要求を満たすものとして経験される。私の行為と、それを動機付けている状況とが、このような意味で「内的に」結びついている」(Morrison 1979: 565)。行為方針 y への動機付けが、或るタイプの実際の行為によって満たされる、あるいはそれらとは異なる類の行為によって満たされないという感覚によって、それが規範性を持つことが明らかとなるのである。

ここまで、従来の研究を踏まえながら『知覚の現象学』における動機付け概念について確認してきた。メルロ = ポンティによれば、動機付けとは、因果性や合理性とは異なる意味的な関係性であり、タイプの行為方針への規範性を

持つものであった。次節では、『知覚の現象学』においてはっきりと述べられているにもかかわらず、上述の先行研究が取りあげていない、メルロ＝ポンティの「状況付けられた自由」と動機付けの関係性について説明する。

3. 「動機付け」論の問題点および自由との関わり

動機付けの議論は、単に知覚経験の構造を明らかにするためのものではない。メルロ＝ポンティは、人間主体が知覚経験の構造を基礎として実存しており、したがって動機付けは主体の実存的な側面、主体が世界のなかで自由を享受するその仕方と密接な関係を持つと考えている。すなわち、動機付けとは、意識経験を持ってこの世界に実存する主体を記述するための包括的な概念なのである。しかしながら、前節で参照した動機付けについての先行研究はその点に言及していない。動機付け概念を論じる以上、自由との関わりを明確にしておくことは必要最低限のタスクであると思われるので、以下ではこの関わりについて検討する。

『知覚の現象学』の終盤で、メルロ＝ポンティは次のように述べている。

私はひとつの心理的かつ歴史的構造である。そして、私は実存と共に或る実存の仕方、或るスタイルを受けとってしまっているのだ。私のすべての行動、すべての思惟はこの構造と関連していて、哲学者の思惟でさえも世界への彼の手がかり—これこそが彼なのだ—を明確化するひとつの仕方に過ぎない。けれども、私は自由であり、しかもそれは、これらの動機付けがあるにもかかわらず、あるいはこれらの動機付けのこちら側でそうだというのではなく、これらの動機づけを手段として自由なのだ。(PP 519, 強調筆者)

ここでは、メルロ＝ポンティの「状況付けられた自由」という考えが提示されている。私たちは、これらの動機付けがあるにもかかわらず、というのではなく、これらの動機付けを手段として自由なのである、と。ここで述べられた自

由と動機付けの関係は次のように言い換えることができるだろう。すなわち、「自由な主体は動機付けられていなければいけない」。本節の議論ではまず、メルロ＝ポンティがどのような議論によってこのテーゼを導き出すのかを検討する。

「自由な主体は動機付けられていなければならない」

メルロ＝ポンティはまず、サルトルをターゲットにして、彼の「絶対的自由」とも言える考えが主体の自由の表現にはなりえないことを指摘している。サルトル的な自由の描像が「絶対的」とされる所以は、それが自由であったり不自由であったりする主体というようなグラデーションを認めない点にある。

私が或る種の行為においては自由だが、それ以外の行為においては決定されているといったことは、考えられない。決定論の働くにまかせるようなそんな怠惰な自由とは何であろうか。(PP 496-497)

このような自由は、ここまで縷々論じてきた動機ないしは動機付けの重みを背負うのではなく、むしろそれらに対して優位に立ち、お墨付きを与える自由である。

もしさまざまな動機が私を或る方向に傾けるとしても、それは次の二つのばあいのどちらかである。つまり、それらの動機は、私を働かせる力であるか—そのばあいには、自由はないことになる—それとも、そうした力ではないか—そのばあいには、自由は完全であり、私が平和な家庭にあるときも、恐ろしい拷問を受けているときも、私は等しく完全に自由だということになる—このどちらかなのである。したがって、私たちは単に因果性の観念だけではなく、動機付けの観念をも放棄しなければならないだろう。いわゆる動機が私の決心に重圧をかけるのではなく、逆に、私の決心が動機にその力を貸し与えているのである。(PP 497).

したがって、結局のところ、自由がみずからその発意によって制限として限定したものを除けば、自由を制限しようようなものは何もなく、主観はみずからがおのれに与えたもの以外に外的なものをもたないことになる。(PP 498).

イチかゼロかという「絶対的自由」の観点からすれば、動機の働きを認めると主体の在り方がすでに決定されていることになり、自由は消失する。それゆえ、主体が自由であると考えるならば、動機付けの観念は放棄されなければならない。

だが、メルロ＝ポンティは「自由についてのこの反省は、自由を不可能にするという結論に達するだろう」(PP 499)と述べて、そこからサルトル的な「絶対的自由」批判を展開する。メルロ＝ポンティは、知覚経験の基本的な構造である「図 - 地構造」を自由の議論にも適用し、「自由な行動がそれとして見られるためには、その行動が、かつての自由ではなかった、ないしあまり自由ではなかった生活を背景にして浮かび上がるのでなければならない」(PP 499)と述べる。すなわち、主体にとって自由という観念が意義を持つとすれば、それは私たちの不自由な状態を背景として自由が浮かび上がってくるからである。この不自由さを担っているのが、私たちの身体図式あるいは心理的 - 歴史的構造の重み、すなわち動機付けである⁹。メルロ＝ポンティの議論からはこのように、「自由な主体は動機付けられていなければならない」というテーゼを引き出すことができる。

以上のように、メルロ＝ポンティは「主体は動機付けを手段として自由なのである」というテーゼへと至る一定の説明を与えている。しかし、メルロ＝ポンティの自由はその記述の曖昧さにおいて批判されてもいる。クワントは、メルロ＝ポンティの議論が「絶対的自由」の批判として意義を持つことも認めつつも、「自由が本当は何なのかという問題を提起しないでしまった」(クワント 1976: 361)と言う。メルロ＝ポンティは、

思考や自由がはたして世界との前意識的な対話の展開として完全に理解されうるかどうかは問題にしないのである。それにしても、〈身体 - 主体〉がどのようにして自分自身を意識するようになり、またおのれの状況を自由の中で決定するようになりうるのかという問いが一つの問題であることは疑いない。(クワント 1976: 361)

〈身体 - 主体〉における世界との前意識的な対話が、思考や自由を持つ主体へと形成していくその過程をメルロ = ポンティは十分に記述できていない、というのがクワントの批判である。この批判の含意を以下で解釈し、最終節の議論への橋渡しとしよう。

「動機付けられた主体は自由でなければならない」

クワントのメルロ = ポンティ批判を理解するための手がかりは、『知覚の現象学』の次のような一節から窺うことができるだろう。

では、自由とはいったい何であるのか。生まれるということは、世界から生まれることであると同時に世界へと生まれることである。世界はすでに構成されてはいるが、しかしまたけっして完全には構成されていない。前の関係からすれば、私たちは世界によって促されることになるし、後の関係からすれば、私たちは無限の可能性に開かれていることになる。しかし、この分析はまだ抽象的である。というのも、私たちは同時に両方の関係のもとに実存しているからである。(PP 517)

メルロ = ポンティは、世界のすでに構成されている側面（動機付け）と、いまだ完全には構成されていない側面（自由）の双方に私たちが実存していると述べている。だが、このことはメルロ = ポンティのテキストのなかで十分に示されていると言えるだろうか。

たしかに、先ほど検討したように、「自由な主体は動機付けられていなければならない」。したがって、自由な主体は同時に動機付けられた在り方で世界に存在すると考えられる。だが、ここで次のような問いを発してみることができるだろう。「動機付けられた主体は自由なのか」と。メルロ＝ポンティは主体が自由と動機付けの双方を持って世界に存在していると述べている。しかし、クワントが「世界との前意識的な対話」と述べていたように、動機付けは自由な意識経験に先立って与えられている。そしてこのとき、動機付けられた主体が動機付けられていることによって自由になるのかどうかは定かではない。すなわち、メルロ＝ポンティは主体が本来的に動機付けと自由の双方のうちに実存しているということを認めておきながら、『知覚の現象学』では、「動機付けられた主体は自由でなければならない」というテーゼを導く議論が与えられていないのである。

メルロ＝ポンティは、主体において自由と動機付けが両立すべきであると考え、自身がサルトルの見解として挙げているような、自由であり一切の動機付けを持たないような主体という考えを批判している。しかし、他方で動機付けられるのみで自由を持たない主体の可能性については検討していない。このように整理したとき、クワントのメルロ＝ポンティ批判は十分に理解可能なものとなる。もちろん、メルロ＝ポンティは動機付けによって決定され尽くした、自由をまったく持たない主体が存在するという「絶対的動機付け」の立場は取らない。前意識的な世界との対話は自由へと展開し、動機付けられた主体には自由が与えられるものだとは彼は考えている。だが、この見解を支持する議論は『知覚の現象学』には与えられていない。

この問題を解決するための糸口は、『知覚の現象学』の三年後に出版された論集のなかに見出すことができる。この『意味と無意味』に収録された「戦争は起こった」という論文のなかでは、動機付けがそもそも主体の在り方を決定し尽くせるようなものではない、ということが論じられている。そこから、「動機付けられた主体は自由でなければならない」というテーゼを導くことができる、というのが筆者の見立てである。次節においてそのことを示し、本論文の

締めくくりとする。

4. 『意味と無意味』における「動機付け」

1948年に出版された『意味と無意味』のなかで、メルロ＝ポンティは第二次世界大戦の際のフランスの状況をマルクス主義的な観点から論じ、自己流の歴史哲学を展開している。興味深いことに、その一端を担う論文「戦争は起こった」には、動機付けが重要な概念として登場している。そこでは、『知覚の現象学』の記述には表れていなかった特徴が動機付けに対して与えられている。或る決定的な場面において、動機付けはその無根拠性を際立たせることになる。そのとき、その穴を埋めているのが世界の根底的な偶然性と主体の根底的な不合理性であることが明らかになる。そして、こうした偶然性や不合理性が、以後主体における動機付けを構成するようになる。この働きをメルロ＝ポンティは「情念」と呼ぶ。以下では、前節で確認した、動機付けが自由を不可欠なものとして要請するというテーゼを導くために、上記の諸概念を検討する。

「戦争は起こった」のなかで、メルロ＝ポンティは次のように述べている。

もしこの男が今日その女を愛しているとすれば、彼の過去の歴史がその女の性格や顔を愛するような準備を彼にさせていたからである。しかし、それは結局彼がその女にめぐり会ったからでもあり、このめぐり合いが、彼女がいなければ眠ってしまっていた可能性を彼の生活の中に目覚めさせたからである。いちど成立してしまうと、この愛は運命のように見えるが、最初の出会いの日はまったく偶然なものなのだ。ある決定は、なるほど個人の過去によって動機付けられるが、約束したよりも多くのものをもたらし、一度実現されてしまうと、現在および現存するものの粗暴な力という、それ自身の意味を持つのである。[...] つまり、その動機付け [...] は指摘しうるけれども、それらの動機付けで描きうるのはある可能な歴史にすぎず、[...] 合理的な説明はその先まで及ばない。それというのも、情念は自

らの動機からおのれを創造するからであって、意識の世界では情念を理解することができないのだ。(SN 253)

この箇所からまず指摘できるのは、動機付けが持つダイナミズムである。「ある決定は、なるほど個人の過去によって動機付けられるが、約束したよりも多くのものをもたらし、一度実現されてしまうと、現在および現存するものの粗暴な力という、それ自身の意味を持つのである」と述べられているように、動機付けられたものはそれ以前の動機付けの総体を変化させ、それ以後の経験の在り方に一定の影響を及ぼしうることを示されている。このような動機付けのダイナミズムは、動機付けの持つ規範性がどのようなものであるかを考える際に決して見落としてはならない特徴である¹⁰。

偶然性・不合理性・情念

「偶然性」、「不合理性」、そして「情念」。これらが、『知覚の現象学』での議論と比較したとき、『意味と無意味』において前景化する動機付けについてのもっとも重要な論点である。「一度成立してしまうと、この愛は運命のように見えるが、最初の出会いの日はまったく偶然なものなのだ」という箇所に対応する。ここで述べられた出会いの偶然性は、情念と関係付けられることになる。

動機付け […] は指摘しうるけれども、それらの動機付けで描きうるのはある可能な歴史にすぎず、[…] 合理的な説明はその先まで及ばない。それというのも、情念が自らの動機からおのれを創造するからである。(SN 253)

私たちはここで、あらゆる情念においてそうであるように、それがなければ情念はある根拠を持ち、もはや情念ではなくなるところの偶然および不合理的の一要素とぶつかるのである。(SN 253)

世界における或る対象との出会いにおいて、その対象を主体が応答すべき対象

として演出した動機付けは、現実がまさしくそうなったことの合理的な説明にはなりえない。或る女性を愛するようになった人間にとって、彼女に備わっていて彼女を愛するように仕向けさせた特徴は、その気になれば彼女以外の人間のなかに見出すことができるだろう。それゆえ、動機付けによって描きうるのは或る可能な歴史の束であって、そこで現実はどういった帰結を迎えるのか、すなわち、同じようなタイプに分類される人々のうちの誰に会うのか、そして、さまざまな可能性を尻目に、いま目の前にいる女性を愛するように決断するのかどうかという問いは、世界の偶然性および主体のなかに見出される不合理性を浮かび上がらせる。私たちは、動機付けのみによって実際に私たちがさまざまな生活を送っているように過ごすことはできないのである。以下で、この偶然性と不合理性について検討する。

第一に、動機付けは主体の身体図式、あるいは心理的 - 歴史的構造に由来するところまで述べてきたが、実際に主体が「動機付けられている状態」になるのは、主体が何らかの世界のうちに在って、何ものかを経験しているときのみである。すなわち、世界と関わり合うことを抜きにして動機付けは発動しえないし、それが具体的にどのようなものであるかも記述しえない。そこでメルロ＝ポンティが語るのは世界の偶然性である。世界が私たちに対してどのような様相を見せるのか、それは偶然によって決まることであって、その意味で私たちの動機付けはアプリアリに私たちの在り方を決定するような要素ではない。

そして第二に、世界の偶然的な状況と直面した後であっても、動機付けのみによっては、私の具体的な行為に対する十分に合理的な説明を与えることができない。第二節で述べたように、動機付けは対象が私に対して呈示する意味を媒介として私に働きかける。この意味を媒介とした働きかけは、或るタイプの行為方針への規範性を伴っている。だがこのとき、当該の行為方針を私が実際にどのような具体的な行為によって満たすのか、それは動機付けによっては決定されていないのである¹¹。通常のばあい、私たちは誰もがやるような仕方であるいは自らがいつもやるような仕方でのこのような動機付けをやり過ぎしてい

るため、このような動機付けの根拠付けられていない側面が意識経験にもたらされることはない。メルロ = ポンティは、ひとが別の人間を特権的な人格として愛するという例を出すことによって、諸々の動機付けにいかに従うかによって自己の実存がまったく異なるものになってしまうような場面を問題にする。すなわち、動機付けは私たちが知識では知っていたとしてもこれまで行ったことのない振る舞い、あるいは自分自身にとってもそれがいかなる帰結をもたらすのか曖昧な行為に対しても開かれているのだが、そのような特権的な場面において、私たちは同時に動機付けの無根拠性にも直面してしまうことになるのである。

動機付けは主体と世界の関係性そのものであり、この関係性は現実化した私たちの行為によって変化するダイナミズムを持つ。このように、自らの在り方をまったく変化させてしまうような仕方では動機付けを成就させる主体、そのなかにメルロ = ポンティは情念という機能を見出す。情念のもとで実際に為された行為は私の身体図式や心理的 - 歴史的構造に影響を与え、動機付けの総体を緩やかに変化させていくことになるだろう。それが、「情念は自らの動機からおのれを創造する」ということの含意である。行為のディテールが異なることによって、私によって働きかけられた世界が次にどのような動機付けを主体のうちに発動させるのか、それはその都度異なったものになるだろう。このように、世界が偶然的なものとして私に与えられ、動機付けが主体に対する究極的な根拠付けを与えられないなかで、主体には具体的な行為へと踏み出し、それを主体と世界の関係性の歴史のなかに組み込んでいく情念という機能が見出される¹²。

情念の特徴は、それが根拠を持ってしまえば情念ではなくなってしまうこと、すなわち、決定的な合理的根拠を持たないことにある。主体は、諸々の動機付けに晒されているながらも、どのような具体的行為を實踐し、おのれをどのように創造するかについて決定的な根拠を持たない。それゆえ、過去の同じ場面の記憶や、共同体の慣習についての知識も当てにならないような、しかも主体の在り方に大きな影響を与えるような決定的な場面においては、動機付けは主体

の振る舞いに十分な根拠を与えることができないのである。情念は自らの動機から、新たな、しかし過去と連続性を持った自己を創造する。情念とは、私たちが偶然性あるいは不合理性に直面していることによって見出されるひとつの機能であり、それは、目の前の偶然的な動機から首尾一貫した自己を新たに創造する。しかし、そのような情念の働きそのものには、動機付けによる根拠が与えられていない。愛が成立し、それが「自然」なものになってしまったあとには、それは愛し合う二人にとって必然の成り行きに見えるが、それを必然の成り行きに見せるような主体は情念によって創造されたのである。

情念に「根拠がない」というのは、具体的な行為が主体の心理的 - 歴史的構造とまったく無関係に生じてきたということの意味ではない。それは、主体の内面に渦巻く様々な感情や情感といったものが、主体にとってどのような意味を持っているかということが、いまだ未決定な状態に置かれている、ということの意味しているのである。第二節で論じたように、動機付ける対象が持つ意味は、動機付けられた行為に依存している。これは、動機付けのなかにはいまだ曖昧で未規定な部分があり、私たちが実際に何を成したかによって遡及的にそれらが規定され、動機付けの総体のなかに組み込まれていくということを含意している。このような情念という機能の導入は、『知覚の現象学』では明確に与えられることのなかった「動機付けられた主体は自由でなければならない」というテーゼを補完する役割を果たしている。本論でのこのような解釈をもって、クワントによるメルロ＝ポンティ批判に対する現時点での応答としたい。

ここまでの議論から、メルロ＝ポンティの自由が動機付けと切り離して論じ尽くせるものではないだけでなく、動機付けもまた自由と切り離して論じ尽くせるものではないことが明らかとなった。こうした前提条件を踏まえたうえでなければ、メルロ＝ポンティが描き出そうとした主体と世界の絡み合いの哲学の全体像を把握することはできないだろう。まだ語り残している問題は数多くあるが、これまでの先行研究においては十分に検討されてこなかった「動機付け」概念の新たな特徴付けの指摘と、その曖昧さを批判されてきた「自由」

と「動機付け」の結びつきの解明とをもって、本論の結論としたい。

註

1 本論で挙げる先行研究のほかに、知覚の「概念主義／非概念主義」をめぐる論争のなかでも、メルロ = ポンティの「動機付け」概念が注目されている。知覚経験の内容が「理由の空間」のなかに位置を占め、信念に対する合理的な関係に立ちうるものでなければならない、という仕方では「概念主義」を擁護する McDowell に対し、Dreyfus はメルロ = ポンティを援用しながら「動機付けの空間」という対抗概念を持ち出し、「非概念主義」を擁護している (cf. McDowell 1994; Dreyfus 2005)。筆者はこの論争に関して、Dreyfus の主張よりも McDowell の主張がよりメルロ = ポンティの見解と親和性を持っていると考えているが、本稿では論じない。

2 「動機付け」という概念は、現象学者の先駆けであったフッサールやプフェンダー、シュタインらによってもすでに論じられていた。メルロ = ポンティは「動機」について述べている箇所の註で、直接シュタインの名を挙げている (PP 39)。本論で複数の哲学者にまたがる概念史まで扱う余裕はないが、フッサールとプフェンダーにおける「動機付け」概念の変遷については、次の論文を参照せよ。八重樫徹 (2009) 「行為・因果・責任—フッサールとプフェンダーの「動機づけ」概念をめぐる—」、『フッサール研究』、第7号、24-36頁。

3 また、川崎はメルロ = ポンティの挙げている例から、人間が社会的な状況の持つ意味によっても動機付けられていることを論じている。その分析によれば、動機付けとは「現象が非定立的な意識に与える「意味 sens」によって知覚や行為が促されるという実践的な関係を指し、メルロ = ポンティが挙げている社会的な革命行為の例において、「革命的行為への動機づけは社会的な生の提供する意味の捉え直しとして記述される」(川崎 2014: 42-43)。

4 また、「彼女」を「パートナーと出会う以前の彼女」に入れ替えたばあいには、このような出来事は生じない。彼女のうちに「二人の思い出の曲」への感受性を養ったのは、パートナーと出会って以後の彼女の来歴だからである。したがって、動機

付け的な関係の記述は、あるときそれが正しいものであったとしても、恒久的に正しいわけではない。

5 この考え方には、原因 A が起これば必ず B が生じる、ということが含意されているように思われる。Morrison は、メルロ = ポンティがこのような見解を支持するよう見える一方で、原因と結果は根本的には論理的に独立した出来事であるとみなすヒューム主義的な見解を持っていたのではないかと論じている (Morrison 1979: 562)。

6 “a course of action” という表現は、「一連の行為」という意味に解釈することができるが、O’Conaill は言葉の多義性を踏まえて「行動の指針」といった意味で用いていると思われる。

7 Kelly がメルロ = ポンティのテキストをもとに論じた知覚経験の「規範性」は、知覚において生じる意味付与の在り方が経験の前後で変化しうる、という経験のダイナミズムを捉え損なっている。その点に関しては、拙論のなかでメルロ = ポンティのテキストから Kelly を批判する議論を別出しつつ指摘している (cf. 田村 2018)。

8 また、本論で何度か名前を挙げている Wrathall は別の論文のなかで、たとえば熟練のチェスプレイヤーにおけるように、社会的に取り決められた規則が内面化されることによって、主体が規則を明示的に意識することなく、対象の知覚によって或るタイプの規則遵守的な振る舞いへと直接促されるようになる現象学的な経験を分析している (cf. Wrathall 2007)。

9 たとえば、動機付けがコンプレックスというかたちで現れるばあい、それが主体にもたらす不自由さは顕著なものとなる (cf. PP 504)。だが、通常の知覚経験や行為において動機付けはほとんど意識されないものであるし、後の議論でも述べるように、動機付けは自由の条件のひとつでもあるため、もっぱら不自由なものとしてのみ主体にもたらされるわけではない。

10 動機付けによって示される経験の規範性が、当の経験によって変化させられる、という論点には拙論のなかで触れている (cf. 田村 2018)。

11 O’Conaill は動機付けが典型的な行為方針を主体に促す、ということを指摘しながら、本論で検討したような自由と動機付けの結びつきについてはまったく論じ

ていない。また、本論で提起した動機付けと具体的な行為の問題は、いわゆる「実践的知識」についての議論と結びつけられるものであると考えられるが、ここでは論じない。

12 この情念という用語がどこまでの射程を持っているのかについては、議論の余地がある。動機付けは私たちと世界との様々な関係性のうちに見出されるものであって、感情的・情感的ではない場面における情念の機能、というものも指摘できるように思われる。そのばあいには、この情念という言葉をもっぱら通常用いられるような語義の拡がりにおいて捉えるべきではないであろう。

文献

- メルロ = ポンティの著作と略号（訳出にあたっては、邦訳を最大限活用し適宜修正を加えた）

PP: *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard, 1945. [『知覚の現象学』中島盛夫訳, 法政大学出版局, 1982年]

SN: *Sens et non-sens*, Paris: Nagel, 1948. [『意味と無意味』永戸多喜雄訳, 国文社, 1970年]

• その他の文献

Dreyfus, H. (2005) “Overcoming the Myth of the Mental: How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise,” *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 79(2), pp. 47–65.

廣瀬浩司 (2014)「次元の開けとしての制度化」, 『メルロ = ポンティ研究』第18号, 65–78頁.

川崎唯史 (2014)「社会的な生の悲劇」, 『メルロ = ポンティ研究』第18号, 40–52頁.

Kelly, S. (2004) “Seeing Things in Merleau-Ponty,” Carman, T. (ed.), *The Cambridge Companion to Merleau-Ponty*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 74–110.

- (2007) “What Do We See (When We do)?,” Baldwin, T. (ed.), *Reading Merleau-Ponty*, London: Routledge, pp. 23–43.
- クワント (1976) 『メルロ = ポンティの現象学的哲学』 滝浦静雄ほか訳, 国文社.
- McDowell, J. (1994) *Mind and World*, Cambridge: Harvard University Press.
- Morrison, W. (1979) “Experience and Causality in the Philosophy of Merleau-Ponty,” *Philosophy and Phenomenological Research*, 39(4), pp. 561–574.
- O’Conaill, D. (2013) “On Being Motivated,” *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 12 (4), pp. 579–595.
- 田村正資 (2018) 「メルロ = ポンティにおける知覚経験の未規定性」, 『フランス哲学・思想研究』 第 23 号, 195–205 頁.
- Wrathall, M. (2004) “Motives, Reasons, and Causes,” Carman, T. and Hansen, M. (eds.), *The Cambridge companion to Merleau-Ponty*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 111–128.
- (2007) “The Phenomenology of Social Rules,” Baldwin, T. (ed.), *Reading Merleau-Ponty*, London: Routledge, pp. 70–86.
- 八重樫徹 (2009) 「行為・因果・責任—フッサールとプフェンダーの「動機づけ」概念をめぐる—」, 『フッサール研究』 第 7 号, 24–36 頁.

付記：本研究は JSPS 特別研究員奨励費（課題番号：17J09278）の助成を受けたものである。